Nature Conservation Society of Hokkaido

会報

北海道自然保護協会

1973　—野付半島（尾岱沼）—　昭和48年12月　No. 14

協会活動状況

（特別の記載のないものはすべて植物園において）

●昭和四十八年四月二十一日
第五十一回　理事会
出席者　伊藤(秀)・斎藤(雄)・石川(俊)・石川(治)・重岡・吉田・明道・伊藤(浩)・野田・井手・小池・村本・小関・芳賀・八木・小川・辻井・久万田・西村
一、総会議題審議
。昭和四十七年度事業報告および決算報告
。昭和四十八年度事業計画および収支予算審議
。その他・映画〝樹海〟上映

●五月十一日　例　会
於・日生ビル九階
講演　都市自然環境の破壊　青　地　晨
映画　大いなる自然(HBC映画社製作)

●五月十九日
昭和四十八年度　総会
於・札幌農林会館　五階会議室
一、昭和四十七年度事業報告・会計報告
。会誌・会報・自然保護通信・例会などの報告およびHBC映画への協賛
・自然保護シール発行への協力等の報告
。昭和四十七年度会計報告および監査報告を承認
二、昭和四十八年度事業計画および収支予算（会報十三号に掲載）
昭和四十八年度事業計画
本年度事業計画としては会誌・会報などの発行、自然生態調査などの実施、各種専門委員会の発足による諸種の調査、研究、講演会、映画会などの開催などが挙げられた。

●五月十九日
第五十二回　理事会
出席者　伊藤(秀)・斎藤(雄)・坂本・野田・門脇・鮫島・小川・重岡・午来・吉田・辻井・久万田・西村　（このほか委任状三名）
一、表大雪循環観光産業道路調査について——愛山渓・湧駒別間に道路を建設するため、北海道商工観光部より依頼があったが、大雪山国立公園内に観光を主目的とする道路は、これ以上不要との観点から調査に協力しないことに決定（別紙により回答）

●五月二十六～二十七日
第三回全国自然保護連合総会
於・山形県　羽黒山
斎藤雄一副会長・井手貢夫理事出席
全国自然保護連合の北海道ブロック理事は、四月二十八日のブロック内加盟団体の協議の結果北海道自然保護協会の斎藤雄一副会長が三名のうち一名選出されました。

●六月九日
第五十三回　理事会
出席者　伊藤(秀)・重岡・小池・午来・坂本・八木・伊藤(浩)・斎藤(春)・石川(治)、小川・辻井・久万田・西村
一、専門委員会の発足
緊急を要する問題として、日高、大雪、釧路問題の専門委員会を発足させることに決定・大雪（委員長・鮫島淳一郎）・日高（委員長・芳賀良一）・釧路湿原（委員長・田中瑞穂）・自然保護教育（井手貢夫）
一、昭和四十八年度委託調査
本年度の調査地域と調査費についての説明、各地域の分担の概要を決定。
一、編集委員会の再編成
編集委員として伊藤(秀)・八木・野田・小池・小川・石川(俊)・辻井を選出した。

●九月三日（月）
常任理事会
午後二時より開催。
出席者　伊藤(秀)・斎藤(雄)・西村・辻井・鮫島。
一、大雪縦貫道に関する環境庁の現地視察につき対策を協議。トムラウシ温泉で鮫島理事が、白金温泉で西村理事がそれぞれ説明、陳情を行なうこと、札幌で会長、副会長が挨拶することを決定。
二、全国自然保護連合の大会に関し、もし明年度、大山が辞退するようなら、北海道で引きうけてもいいのではないかと考えられるが、状況をもう少したしかめることとなった。
三、本年度委託された自然生態調査を早急にすすめることとし、担当地区を決め現地調査の日程を各自立てることと決定
四、自然保護通信を発行すること。内容は大雪、函館山、風蓮などとすること。

●九月九日
大雪山縦貫道路建設阻止全道集会
於・白金温泉・北海荘
大雪山縦貫道路予定地を環境庁自然環境保全審議会では、林・中村・吉阪の三委員によって現地視察を実施することに決定し全道の自然保護十三団体では、これにむけて現地集会を開催。北海道自然保護協会も主催団体として参加することに常任理事会で決定し参加した。

●九月十二日（水）
編集委員会
午後六時より開催
出席者　伊藤(秀)・斎藤(雄)・小池・八木・久万田・辻井・小川・山口・石川
一、会誌は年一回とし、ページを増すことにする。会報は年四回、報告だけでなく、重要事項をアピールする性格をもたせる。通信は随時発行。
二、次号の会誌は十月末締切りとし、大雪特集とする。大雪の自然誌、登山史、開発問題などを中心とすることと決定。

●十月八日（月）
常任理事会
出席者　伊藤(秀)・斎藤(雄)・久万田・辻井。
一、委託調査報告のとりまとめについて形式その他を打合わせ、昨年の例にならってまとめることと決定。
二、会誌の原稿集まり状況不良で、できるだけ催促すること。会報は小川理事が担当してまとめることなど決定。
三、自然保護通信七号の発送を報告。

●十一月一日（木）
常任理事会
出席者　伊藤(秀)・斎藤(雄)・西村・久万田・辻井
一、会誌、会報原稿の集まり工合の現況報告、発行ややおくれる見込み。
二、専門委員会について、各委員会宛てに事務経費を送ることを決定(各二万円)
三、JUNC（全国自然保護連合機関誌）5部を連合の要請により購入。
四、大雪問題につき一応落着したので、各方面に挨拶状をつくり会報を共に送附することとする。
五、理事会は明年正月明けに開催。

●十一月二十一日（木）
編集委員会
出席者　伊藤(秀)・斎藤(雄)・八木・石川・野田・久万田・山口・西村・辻井
一、編集委員長に石川理事を推選
二、会誌原稿の集まり工合を報告、現在のままでは約七〇～七五ページのものになるはずとのことが山口編集委員から説明あり、グラビアの位置、レイアウトにつき討議。
三、表紙体裁を若干変更する事を決定。
四、次号会報のテーマは羊蹄ニセコ問題とすることと決定。

●十二月六日（木）
常任理事会
出席者　斎藤(雄)・久万田・西村・辻井
一、円山原始林附近を通る道路計画につき市民からの要望を通信にのせること。
二、理事会（一月十九日）の開催、議題として大規模林業圏、都市内道路問題などを挙げることに決定。

大雪を守る運動の経過と問題点

田代沼太郎

大雪山縦貫道路の問題は、北海道開発庁が環境庁に提出していた協議書をとり下げ、計画を白紙に戻すという奇妙な方法で、数年間の論争に一応の結論が出された。ここでは「大雪の自然を守る会」の活動がはじまった昭和四十六年夏以後の経過を振り返りながら、今後の展望などを記してみたい。

昭和四十六年以来の経過

46・8月「大雪の自然を守る会・準備会」発足。この会が生まれるきっかけは、道自然保護協会が開催した「自然保護シンポジウム」であったという。なにか皮肉なものを感じるのは私だけであろうか。これ以前に孤独な反対運動をつづけていた北大自然保護研究会も、忘れることはできないであろう。

46・11・19　同会代表が大石環境庁長官と会見、長官道路建設反対を表明。

46・12・3　「大雪の自然を守る会。新得」発足。

47・1・14　「大雪の自然を守る会・札幌」正式に発足。

「――守る会」は署名を集めたり、パンフを発行するなど、精力的に活動を行なった。夏の現地調査を前に、各報道機関も徐々に大雪山に注目するようになってきた。行政側はひたすら現地調査待ちでほとんど動きがない。

47・8・11～14　環境庁・開発庁現地調査。

47・8・26　小山長官現地視察、現在のルートは認めないと発言

47・9・9　環境庁、ルート変更を条件として縦貫道路を認めると発表。

47・9・18　開発庁　新ルート案を発表。

47・9・19　環境庁、このルートを認める方針を明らかにする。

現地調査から変更ルートの承認まで、一息に進んだ。あらかじめ筋書きができていたとしか思えない、電光石火ぶりであった。だが、このことが逆に自然保護団体の危機感をあおり、世論を一気に沸き立たせた感があった。東京では全国自然保護連合が中心となって運動がすすみ十月には同連合の中村芳男理事長が来道した。この、現地調査から審議会までの二カ月余が、縦貫道路問題のヤマ場であった。促進派のあまりにも猛烈な働きかけが、審議会に逆に作用したともいわれる。

47・10・31　自然公園審議会で結論が保留され、継続審議となる。

会長挨拶

伊藤秀五郎

新規約によって選出された理事会で会長にあげられました。私自身、本会の会長に適任であるなどという考えは毛頭ありませんが、いわば本協会の再出発にあたって、人事問題でごたごたしないほうがよいわけですから、皆さんのご推薦を快くお引受けした次第です。会員の皆さんの御協力と御支援によって、任期中この役目を無事に果たしたいと考えます。

本協会発足以来、長いあいだ会の発展と維持のために御尽力いただいた東条前会長、大飼、今井前両副会長と、会務の中心になって手腕を振われた井手前理事長に、長年のご労苦を感謝いたします。

さて、切り捨て御免の封建時代はともかくとして、わが国の現在ほど、生命尊重の精神に乏しい時代はなかったと思います。生命の尊重は、自然の愛護と同根の精神だと思いますが、わが国の現状は、物質的繁栄はありますがまさに精神的に荒廃した世相だと思います。わが子の生命を軽んずる悲しい忌むべき行為が、日常茶飯事として毎日のように新聞紙上に報ぜられるという一事をみても、精神的荒廃の根の深さがわかります。

自然についても事態は深刻です。過去十五年間、燎原の火のごとくわが国の山野の森林を切り払った林野庁の皆伐政策は、長期的展望を欠いた近視眼的政策で、しかも自然の摂理、自然の均衡・自然の法則を無視した、眼先の経済しか念頭にない政策であったとは、その結果として、いまこれを間伐と伐採量の制限の方向に政策転換しなければならなくなったことが、明らかに物語っています。

発達した機械力を動員して、過去二十年間一貫してこの政策を押し進めた結果が、こんにちいたるところに見られる山岳森林地帯の広範囲な裸地化と平地林の消滅であります。私はわが国の各地で、この十五年間に切り尽された森林地帯をみて、この政策を押し進めた人たちが、精神的に貧しい、残酷な心の持主ではないかという感を深くします。よくもこうまで無残な措置ができたものだと感心しています。瀬戸内海の汚染なども同じです。

自然・国土は、大局的にみた場合、私有地・公有地・国有地の別なく、前世代からわれわれが引き継いだ国民全体の共同財産であって、これを良い状態で後世に残すべき責任があります。ある特定の世代が、これを破壊してもよいという権利も自由も与えられていないのではないかと思います。

今後は本道の総合開発計画の中に、環境保全計画が組み入れられるべきであると考えます。従来、政治家・企業家・経済学者に、エコロジーの知識と観念に乏しい人の多かったことは争われません。そして生態学者の発言は、十年ほど前までは無視されるか、無視されないまでも発言力は非常に弱いものでした。われわれの世代で、はたして生態学者の警告が正当に評価され、適切な政策として生かされるかどうかはなはだ疑問であります。

わたくしどもの協会は、けっして強固な財政的基礎も組織も持ってはいません。しかし自由な民間団体の立場から、自然愛護の精神の普及と浸透と、正しい環境保全政策の実現に、さらにいっそう努力すべきであると考えます。

（四十八年度総会における挨拶）

審議会の大勢は反対だったそうだが、おそらく環境庁の面子の問題もあって、継続審議となった。これ以後先日のとり下げまでは、わが北海道自然保護協会のピンチなども織り込み、まだ大方の記憶に新しいところであろう。

評価と今後の展望

今回の結果に対して、多くのマスコミは住民運動の勝利とか、北海道の開発行政の転機と受けとめていたようである。

たしかに、「大雪の自然を守る会」を中心とする反対運動がなかったら、縦貫道路はいまごろは着工されていたかもしれない。

昭和四十六年夏、日本中の自然保護関係者の目は尾瀬に注がれていた。その後大雪山が関心を呼んで二年が経過し、いま、マスコミの目はすでに大雪を離れ、他の目標を求めはじめているように見える。そして、あれほど騒がれた尾瀬は、その後どうなったか。運動の高揚と、一時の勝利感が冷却するのを待っていたように、大清水～一ノ瀬間の道路は車道化されているという。保護運動が得たものは、そんなに大きな勝利ではなかったのである。

大雪の場合にはどうか。開発庁が着工を諦めたのは、住民運動の抵抗が強かったためには違いない。しかし、だから開発庁がこれから自然保護を充分に考えた事業をするようになると信じる人は少ない。開発庁自身が、縦貫道路を最終的には諦めていないような口ぶりである。ここに見られるのは単なる作戦上の一時的

退却であり、単にうるさいからしばらく待とうということであり、反対の大きな論拠であった原始性の喪失を全く理解できずに、ただ自然破壊を技術的に解決することだけを考えている姿勢である。だが、自然保護運動が根本的に問いかけていたものは、まさに、技術至上主義による人間性の喪失ということではなかっただろうか。

もちろんもっと楽観的な観測もある。開発庁があのように言うのは、地元町に対する鎮静効果と、自己の体面保持が狙いなのであって、実際に縦貫道路計画が生き返ることはもうないのであると。あるいはそうなのかもしれない。しかし、とにかく私たちとしては油断しないことが必要であり、こんどの結果から、本質的には何も解決されていないことを承知しておくのがよいと思う。

これからも、縦貫道路のような計画がもっと口当たりのよい衣に包まれて各地で登場してくるに違いない。大雪の自然を守る会は、大規模林業圏開発計画を、次の課題とすることを考えているようである。この計画に含まれる林道のいくつかの路線が、明らかに観光目的の色彩が強く、縦貫道路と同じ性質のものではないかということと、いま大雪山麓等の地域にのこされている天然林が、この計画によって大量に伐採されるのではないかなどの疑問がすでに出されているという。いまある林道の問題なども含んで、この大型計画が今後の自然保護の焦点のひとつになることは確かなようである。

最後に縦貫道路問題で、もともと低かった行政機関に対する信頼感がさらに著しく低下したこともつけ加えておこう。長官が変わるたびに態度を一八〇度転換させた環境庁、観光目的を明らかにした資料を持ちながらそれを隠し、産業道路だと主張し続けた開発庁、それに追従するのみで、ついに独自の態勢をとれなかった道。これらの機関が、縦貫道路問題で得た教訓をどのように今後の施策に反映させてゆくかも、私たちが注目していなければならない点である。

新得町における大雪縦貫道路開削反対運動

大雪の自然を守る会・新得

大雪山縦貫道路開削計画は環境保全審議会の不許可答申を予想し、その影響を恐れる道開発庁により、建設申請がとり下げられ、中止されました。これは自然を愛する人々の粘り強い運動と、これによる世論の高まりの一応の勝利であると考えます。しかし私達は、不利と見るや申請をとり下げ、審議会の存在すら平気で無視する、高慢で自然保護観念の欠落した役所を持つ「不幸」を胆に命じておかねばなりません。

この二年間、私達は地元・新得町において細やかながら反対運動をつづけてまいりました。会の活動を一段落させるにあたり、活動を簡単に振り返って、新たな模索の礎としたいと思います。

新得町は人口約一万、山間の小さな町です。農林業などの基幹産業は、切り棄て政策と悪条件を克服できず、不振を強いられており、有力な企業も持たぬ典型的な過疎の町であります。町内には沈滞ムードが漂い、「なんとかしなくては」という焦りが高まっていました。低迷を突破し、新しい展望を切り開く「目玉」として役場当局が考え出したのが観光開発でした。

町当局は、大観光地である表大雪とトムラウシ温泉を自動車道で結び、同温泉を中心に一大観光地を実現させようと夢見たのです。この道路を実現させるため町当局は表向きには科学的裏付けに乏しい地下資源や森林資源の活用、さらには山火事などの災害から山を守るために是非必要な産業道路であると宣伝し、新得町の生命線となるだろうとさえ言い出したのです。町当局は町民の大部分が知らないうちに、大雪縦貫道は地元住民全員の悲願として、関係機関に対して精力的な建設運動をつづけました。大部分の町民の縦貫道路に関する意識はきわめて低く、役場当局や商工会の意気込みとの間には大きなギャップがあったのです。もちろん、町当局を中心とする促進派も一般町民も、故意か知らずか道路開削による自然破壊などに関心を払うことはありませんでした。

私達は個人のレベルでは町当局の宣伝に不信感を持ったり、東大雪を第二の知床にしてはならないとの意見を持っていましたし、「山路山の会」という登山グループは機関誌「トムラ」でこの問題をとり上げ反対の態度を表明していたのですが、運動体を形成するにはいたりませんでした。

こんなとき、大石元庁官の建設中止宣言があり、自然保護団体の活動開始に刺戟され、地元でもなんらかの反対運動を起こそうというので七十一年十月に準備会を十二月には会員二十四名による「大雪の自然を守る会・新得」が名のりを上げました。会は会則や組織を持たず、会員の総意と会費とで運営すること、大雪縦貫道一本に的を絞り、これが終結した時点で解散するとの原則を確認して発足したのです。

多くの議論の末、町当局や商工会との対決は覚悟のうえで、「全町民の悲願」ではないという証しを立て、町内世論を喚起することを目標に活動を開始しました。新聞折り込みチラシ十一回、ポスター、立看板、スライド会など、なるべく種々の手段を用いて町民に私達の存在と主張を認めていただけるよう努力したつもりです。

私達は縦貫道路のもたらす産業的効果は大きくなく、過疎をくい止めることはできないこと、町当局がいうようなバラ色の計画では決してないこと、新得町に必要なものは縦貫道ではなく、地域の特殊性を生かした、きめの細かい政策と生

活、産業基盤の整備であること、東大雪の自然が貴重で弱いこと、自然を破壊する観光開発はけしからんことなどを考え考え主張してきました。この活動は、実は私達自身の勉強だったんだなあと思います。

発足当初はわれわれの存在を無視しようとした役場当局も活動の粘り強さと、主張が核心をついて説得力を持つにつれ私達をけむたがり、一部には威めいた言葉も聞かれるようになりました。これは一つの効果として評価したものです。

しかし一般町民の関心は表面的には期待したように高まらず、私達を落胆させ、外部との連携活動に力を入れるようになったのです。陳情活動・現地踏査などを通じて地元反対組織の存在が広く知られるようになりましたが、マスコミの力は大きいなあと感じました。それにしても、地元の運動体が地元民の意識の盛り上げに表面的には失敗したということで、何度かの停滞期を経てきたわけです。

私達の主張が目に見えない形で町民の間に浸透していたことが、地区労の反対表明や今年七月の町長選挙で促進候補をおさえ、中立候補が勝利するという形で明らかにされました。この結果、役場、商工会のいう「全町民の悲願」という虚像は崩れ落ちたのです。これは全国的な世論の高まり、自然保護団体の活動とともに、道路計画を中止させた大きな要因の一つであったろうと思います。

今回の活動を通じ新得にも自然を大切にしようという意識が芽生え、人の輪ができました。これは私達にとって何よりの収穫です。当初の目標が一応達成されたいま、私達は再び新鮮な感覚で集い、活動することを確認して「大雪の自然を守る会・新得」を解散いたしました。

最後に、一緒に闘った各地の自然保護団体、どたん場まで自然保護の砦として機能された自然環境保全審議会、自然公園部会委員各位に、また、私達とともに行動された町民各位に深く感謝いたします。

私達はすでに次の「開発計画」が、道開発庁により用意されていることを知っております。ふたたび共に活動できる日も近いかもしれません。

大雪を守る運動の残した教訓と今後の展望

小川　巌

大雪山縦貫道路問題は、「とり下げ」という曖昧な形をとって一応幕を下した。この結果が〃芝居〃のザ・エンドを意味したものではなく、はじまったばかりの芝居の一幕目が終わっただけの〃幕あい〃であり、警戒を怠れない点については、本会報で何人かの人が述べているとおりである。具体的な運動を通して将来を見越した場合、そうとしか思えないという指摘は、正しさを含んでいると思って間違いないだろう。

この運動に本腰を入れて参加せずに、常にアウトサイダー的立場から運動を傍観してきた私にとって、一応の結着がついたとみられる現在、この問題にあれこれ嘴をはさむのには、非常な心苦しさを覚えないわけにはいかない。しかし、岡目八目には岡目八目の見方があってもいいはずだし、それを披瀝することによってわずかでも今後の運動に資する面があれば幸いと思い、敢えて「ペン」をとった次第である。

じつは今度の問題に一応の決着がついた時点で、運動にたずさわっていた人々が勝利にひたることもなく、冷静にこの成り行きを受け止めて、次の問題に照準を絞った手際のよさには、むしろ驚かされた。事実、大雪の問題が片づいたからといって、胸をなでおろしていられるほど悠長な状況ではない。どんな形をとっても、「開発」が至上であるこの国にあっては、〃温床〃がそのままである限り一つの芽をつんだからといって、今後いくらでも芽を吹かそうとする力が働くからである。

大雪の場合は、地元のため、鉱業、農林業開発のためと称しておきながら、じつは観光目的の道路でしかないことをはっきりさせ、そこを一つの突破口にした点は〃恵まれて〃いた。同時に、その弱点を集中的に突いた戦術はあざやかだったといえる。

しかし、「とり下げ」決定直後の朝日新聞の記事で洞察されていたように、これから開発を進めようとするところは、日本で有数・最大で最後の「原始地域」であるとは限らない。むしろ、大雪山のような〃恵まれた〃地域ではなくて、なんの変哲もないけれどわれわれにとっては重要な場所が対象になった場合、どう対処するかという困難な問題については未解決に近いこともまた事実である。

今回のケースばかりでなく、これまでの自然保護運動が、往々にして自分達が日常住んでいる地域を離れた、いわば他人の住んでいる土地「それは地方であり田舎であり、過疎地域なのだ」のことを問題にしていながら、そこあるいはその近くに住む人達のことを半ば忘れ去って進められてきた節がある。

つまり、動植物、景観といった立場で自然が語られることはあっても「人間」のことがおき忘れられた、といってもよい。マスコミに好んでとり上げられる「人か自然か」という標題は、きわめて一面的な見方でありながら、「自然」ばかり問題にして、「人間」について考えおよばない自然保護側の見方を皮相的にいい表わしているのではないだろうか。

「原始地域であるから守らなくてはならない」とは理論的ではないにしても、環境が極度に悪化した今日、重みのある

訴えであるのは確かだ。一方、そういった貴重さに寄りかかっていることが、保護の論理の詰めを曖昧にしかねない点に思いおよぼす必要がある。その一例が先にあげた「人間」不在といって悪ければ地元民軽視の自然保護でなかったか。この弱点は、早急に克服しなければならない。つまり、「人も自然も」という志向がそれである。

この動きはすでに北海道においても始動しているが、それは伊達の火力発電、岩内の原子力発電問題であり、苫小牧東部工業基地問題で、あいにく既成の自然保護団体から提起されたものではない。こういった状況にあって、大雪縦貫道路の問題に正面からぶつかった大雪の自然を守る会の活動は、先駆的な意味をもっているが、一つだけ前者の運動と異なるのは、やはり「人間」についての基本的考え方ではなかったか。

どういうことかというと、大雪山の周辺町村は軒並み悪性の過疎に悩まされているのは周知のとおりである。たとえば、五千人の人口が四千人に減ったところで、何でああまで過疎といって騒ぐのか、と東京や札幌に住んでいると思われがちだが、もしそういう立場で過疎地を含めた地域の自然保護を語るとしたら、全くナンセンスというものだ。たかだか一〇%か二〇%の減少率といっても、大部分は学校を出たての若者、働き盛りの青壮年層の流出なのである。

こういった深刻な事態に直面している町村にとって、道路などの土木工事が地元で行なわれることは、理事者にとっても住民にとっても過疎の歯止めに少しでもなるのでは、と考えたところで不思議はない。しかし、彼らにとってもそれが本当に起死回生になるかどうかは分からず、ただそう願っているだけというのが本音ではないだろうか。道路ができれば過疎が食い止められるくらいなら、十数年前からジワジワ進行した過疎が、少なくともいまほど危機状態を招かずに済んだはずだ。

大雪の運動を担った人々は新得の人達を除いたら、大部分が都市住民であった。彼らが地元町村の人々、わけても農民のおかれた状況をどれだけ把握、理解しようとしたかは問題の残るところである。むしろ、開発局や国に向けるのと同様、地元民とは対決的に終始したのではないか、という疑問が残る。

大雪の運動を通して、縦貫道路が過疎の歯止めにならないどころか、一層の拍車をかける可能性のほうが大きいことが運動の過程で明らかになった。地元産業振興をいくらうたっても、一本の道路が過疎の決め手にならないことが分かれば地元民と手をつなげる可能性はあったはずである。何といっても、地元が反対ののろしをあげるのが一番強い。これははっきりしている。なぜなら、地元の人にとっては、札幌の人間以上に身近な環境だからである。この意味するところは重要だ。自然保護側に以上述べたようなとり組みが、稀薄だったことは認めなくて

陳情書、要望書 意見書、回答文書

愛山渓・湧駒別間道路に関する調査依頼について

HNC第九九号
昭和四十八年六月一日
北海道商工観光部長殿
北海道自然保護協会長
伊藤秀五郎

標記の件につき本協会としては、大雪山国立公園地域内には少なくとも観光を主目的とした車道は、現在以上建設されることは望ましくないとする観点からお引受けいたしかねることとなりました。悪しからずご了承くださいますようお願い申しあげます。

風蓮湖の自然保護に関する要望書の送付について

HNCS第一〇〇号
昭和四十八年七月二十六日
根室市長　横田俊夫殿
北海道自然保護協会
会長　伊藤秀五郎

標記要望書をご送付申し上げますので、よろしくご検討のほどお願い申し上げます。

うつし提出先
北海道知事
KK風蓮湖国際クラブ
風蓮湖を守る会

風蓮湖湖畔観光開発に対する要望書

本邦における代表的な潟湖であり、道立自然公園にも指定されている風蓮湖湖畔において、最近ゴルフ場建設など大規模な観光開発計画が進行中であると聞いております。北海道自然保護協会は、この観光開発計画に強く反対するものであり、貴市におかれても速かに中止の指導をとられるよう要望いたします。

自然公園としての風蓮湖の真価は、その原始自然景観にあります。最近の大規模な産業、観光開発の進展に伴って、まだ自然が残されていると考えられて来た本道においても、原始自然景観は急速に失われつつあり、とくに風蓮湖は潟湖としては、わが国最後のものであります。このような時期に、風蓮湖湖畔にゴルフ場が建設され観光開発が行なわれること

はなるまい。

大都市あるいは都会が、身近な環境を食いつぶす形で急激な膨張をなしとげ、あらゆるものを集積し、その集積の利益（度を越すと不利益のほうが増すのは周知のとおりだが）の恩恵に浴していることに、都市住民が意外と気づかずにいる。都市住民が一方で自然を食い潰し、もう一方で自然保護を唱えるのは、食いつぶした責任は個々人にはないにしろ、かなり身勝手さを含んでいる（札幌近郊の自然が貴重でないと誰がいえるものか）。田舎・地方に住む人は、この辺のいきさつを敏感に感じとっている。

両者が手を組むには、たとえば道路を例にとるなら、道路建設がどういう効果をもたらしたかを、プラス、マイナスの両面から追求し、そのデータをもって開発側に対しては、その欺瞞性を突く材料にし、関係町村に対しては過疎の決め手になり得ないことを提起するのも一つのやり方である。開発〃先進地〃の本州では、いくらでも先例があるのだから。

おそらく、自然保護側がそう動き出す前に、開発側は地方の地域住民の利益を前面に打ち出して、われわれとの結びつきに楔を打ちこむ事態は想定できる。しかし、大部分の開発の終局的な目的が、地元民に対する利益にあるのでない以上そのやり方には落し穴があるはずだ。そこを痛く突くことが、戦略的にも重要さを帯びてくるに違いない。いうは易しで地元には地元の困難さが横たわっている。われわれはそれをなんとしてでも乗り越えなくてはならないのだ。

この決意にもかかわらず、見通しは決して明るくない。自然保護側がカンパ、絵葉書販売といった自前のささやかな資金で、わが仕事の合い間をぬうようにして活動しなければならないのに対して、開発の側は、あるときは税金という多額の資金を使って、あらゆる情報を駆使して「次の手」を考えていくからである。今回の「とり下げ」にいたる過程が、自然保護運動の質的向上に大きく寄与した以上に、開発側にも多大の「勉強材料」を与えたことは、忘れてはなるまい。

（北海道大学農学部）

大雪縦貫道問題をふりかえって

藤村俊彦

日本における今後の自然保護運動を左右するとまでいわれた大雪山縦貫道路は開発局のとり下げという形で一応の終止符がうたれた。本協会が設立されたときは、すでにこの問題が大きく議論されており、地元として直接その渦中にまきこまれざるを得なかった。しかし、すでに真正面からとりくんでいた〃大雪の自然を守る会〃の方々が、本協会の会員として多く参加していただいたおかげで、短時日の間にその計画の無謀な全ぼうを知ることができ、運動に参画できたことは、人に深い感銘を与えて来たこの貴重な自然が損われるばかりでなく、この自然公園の価値を著しく低下させることになります。

更に、風蓮湖およびその周辺地域は、特別天然記念物タンチョウの釧路湿原に劣らない営巣地として注目を集め、またわが国有数のオオハクチョウの冬期飛来地として鳥獣保護区に指定されております。これら著名な生物を別にしても、風蓮湖周辺の動植物相は道東地域の代表的な生物群集の様態を呈し、学問的にも貴重な価値を有しております。このような生物群集は、現状の自然が保たれてこそ維持できるものであり、ゴルフ場建設に伴う樹木の伐採など急激な現状変更が行なわれれば、たちまち崩壊をきたすことは明らかであります。また産業としての漁業にも、大きな打撃を与えることは必然であります。

もちろん根室地方は古い開拓の歴史があり、風蓮湖周辺も原始状態が保たれて来たものでないことも事実であります。しかし現状を見るに、過去の傷痕を見せながらも森林は回復に向いつつあり、今後人工的な破壊が加わらない限り、復元するものと思われます。むしろ、次代に引き継ぐ財産として積極的に復元を助けることこそ、現代のわれわれの責務であると考えられます。

風蓮湖の原始自然景観、ならびにそこに生息する動植物は、道民の宝というべきであります。この貴重な自然がゴルフ場建設などの観光開発のために破壊されることは、許されるべきではありません。重ねて中止の指導をとられるよう強く要望致します。

。

大雪山縦貫道路計画について

昭和四十八年七月十八日

自然環境保全審議会委員殿

ほか四十四名あて

北海道自然保護協会

会長　伊藤　秀五郎

標記道路計画につきまして、本協会は大雪山国立公園のもつ意義の存亡にもかかわる問題として、建設に反対の意を表明してきました。多くの山岳道路がかけがえのない自然に与えた前例にかんがみ各委員におかれましては本計画の実施に反対せられるようお願い致す次第であります。

。

大雪山縦貫道路計画について

昭和四十八年七月十九日

環境庁長官　三木武夫殿

北海道自然保護協会

会長　伊藤　秀五郎

標記道路計画につきましては、本協会は大雪山国立公園のもつ意義の存亡にもかかわる問題として、かねて建設に反対の意を表明してきました。多くの山岳道路がかけがえのない自然に与えた前例にかんがみ、本計画の実施を中止せられるよう要望致します。

幸せであったといえよう。

太平洋沿岸の植物群落の保護や士幌高原道路のような大きな問題をかかえながらも、縦貫道問題に全力を集中せざるを得なかった。そして数回の談話会を経て理事会の決定で専門委員会を設けて対処することとなったが、地元であるがゆえの悩みも大きく、深夜近くまで激論がたたかわされたこともあった。その結果、あくまでも絶対反対の意見一致に到着したのであった。したがって本協会としては、環境保全審議会の正式議題としてとりあげられたうえで、不許可になることを最終の目的としていたわけである。

役所のメンツにこだわって、再申請の余地を残した「とり下げ」ということには非常に不満であり、憤りをおぼえる。今後二度とこの計画が頭をもちあげることのないように監視することは当然であるが、地元の利を生かして、東大雪地域の息の長い科学的な調査を行なって、一般の方々にも理解していただけるような科学的論拠を充実してゆくことが、もっとも重要であろうと考えている。

また、もう一つの大きな問題は「大規模林業圏」計画である。そのスケールの大きさは縦貫道とは比べられないほど大きく、その目的も結局、集中皆伐と観光化とに集約されるようである。本協会では、すでに談話会でこの計画を議題として説明会をもったが、まだ流動的な面もあって討論段階である。しかし、この問題は必ずや大問題となるであろうし、来年度から会の最大の柱がその対象であろうと認識している。

大雪縦貫道が不満足ながら一応の結末がつけられた現在、多くの方々からよせられた温い協力とご指導に深い謝意を表するとともに、山積する問題に対してますます連携をつよめて、政治の中に自然保護が当然の柱とされるときまで頑張りたいと思います。今後ともご助言、ご指導をおねがいします。

（十勝自然保護協会・理事長）

これからの〝大雪縦貫道路〟

前田　満

大雪縦貫道路の建設が中止に決まった直後、あるテレビのニュース解説をきいた。それは、開発に伴う住民への受益の少ない大雪の道路問題と比べ、住民の利益と結びついた他の地域の自然保護をめぐる紛争は解決が難しいという意味の話

大雪山縦貫道路建設反対に関する要望書

自然環境保全審議会会長　林修三殿

昭和四十八年九月九日

大雪山縦貫道路建設阻止全道集会

主催団体

大雪の自然を守る会会長　坂本直行

旭川・大雪の自然を守る会会長　水野好吉

大雪の自然を守る会新得代表　塚本達

北海道自然保護協会会長　伊藤秀五郎

十勝自然保護協会会長　西武

十勝・山岳連盟会長　西部純市

芽室・自然を知る会代表　藤村俊彦

大樹自然を守る会代表　米山寅吉

帯広公害対策市民会議代表　鈴木武夫

帯広自然保護研究会代表　村田正則

帯広畜産大学自然探査会代表　高倉明正

北海道大学自然保護研究会部長　小野沢鉄彦

小樽生物保護研究会会長　新海雅典

私たちは、過去二年間にわたって大雪山の自然の重要性、日本における位置づけ、将来の国立公園の自然のあり方、人間の自然への接し方などについて説明し大雪山においては縦貫道路を含め、今後観光道路の建設は絶対にすべきでないことを主張してまいりました。

しかし、北海道開発局の「開発道路天人峡新得線・経済調査報告書」にみられるように、本道路計画はまさに観光道路そのものであります。この道路を産業開発基幹道路であると主張する北海道開発庁・北海道庁あるいは地元町当局の説明を鵜呑にした環境庁・事務当局は、初代大石長官が「この道路は認められない」としたにもかかわらず、長官が小山長官に交代すると認可しようとして自然公園審議会に諮問してまいりました。しかもこの小山長官ですら、「観光道路であれば認められない」としているのです。

私たち北海道に住む住民は、大雪山の自然の価値が、世界的にみて貴重な日本の財産であると理解しており、しかもこの地域に、この価値を破壊してまで産業開発上地元住民の真の利益となりうる道路はありえないと理解しています。

現在、自然公園審議会とこれにつづく自然環境保全審議会の委員各位の良識により審議保留となっていますが、この現地視察を契機として私達の世代に「日本が世界に誇れる自然のすべてを破壊し去った」と後世の人達から批判されることのないよう、自然環境保全審議会委員の良識を期待し「大雪山縦貫道路の建設計

であった。

私は「大雪の自然を守る」運動に、ときおり参加したにすぎないけれども、これとすこしちがう考えをもっている。大雪のばあいも、促進派の活発な動きもあったし、開発計画も地域開発を旗じるしに二転、三転しながらも執ように進められたのである。

この運動の成功は、なによりも三年余の個人の小さな運動の積上げ……情報をえ資料を集め、宣伝と行動の計画を毎日たてて、根気づよく広い階層に訴えた有形・無形の…によるものであることは当然だが、今後の「大雪を守る」運動にとって、徹底した総括が必要だとおもう。

自然保護の運動の新しい経験

大雪山縦貫道は、行政機関への建設促進がおこなわれたのが三十五年。知事や開発局のあいだで下調べや計画案の協議がすすみ（四十一年）、やがて反対運動が起こる（四十六年）わけだが、この運動は全く素朴で、単純な目標での自然発生であった。世の組織的な運動の経験者にとっては、これが運動といえるかと思われるほどのものであったろう。〃大雪の自然を守れ〃というスローガンは、一部の登山家や自然愛好家の運動として理解されていなかったろうか。

それが、貴重な動植物を破壊から守れという受身の姿勢から、積極的に開発計画の内容に、批判の目が開けられるようになった。「地域振興のため林業生産、農畜産の発展、流通の円滑化、地下資源の開発」という説明はいつわりであって真のねらいは観光開発にあると、資料を調べ専門家の意見を集めて行政と正面から対決した。

道内ばかりでなく、全国各地に「残された最後の自然」を保護しようと守る会が、ぞくぞく結成された。この運動体は誰が会長かわからないうちに、多様で創意にあふれた活動……宣伝・署名やカンパ活動、映画や講演会、絵はがき、さらに陳情や政党、マスコミへのはたらきかけが従来の運動形態もとり入れ、さらに新しい方法を生みだし……が拡がった。この運動の高まりは、もちろん会員の日夜を分かたぬ苦労が基になっているが、まわりの公害や自然破壊にこらえきれなくなっている市民感情に、この「最後に残された大雪の自然を守れ」という願いはうまく結びついている。運動は幸運な条件にとりまかれていた。

今日、人びとの目のとどかないところでも、すさまじい自然破壊が進行している。大雪縦貫道は、その破壊されない自然のスケールの大きさと原始性を兼そなえ、最後に残された自然だという切迫した感情が、階層のちがいをこえて結びつき焔になったのだ。公害の激化と人口、食糧、経済の異常な『成長の限界』ローマクラブが心ある人びとの気持を暗くしているときに、この大雪の縦貫道を中止させた力は、私の眼前をさえぎった暗雲をはらいのけてくれた。敗北つづきの自然を守るたたかいに、こんな明るいニュースはない。

では、これからどうなるのか。

これからの運動

十月十九日、道開発局が道路開発の申請を取消す少し前、自然環境保全審議会に向けて、守る会から出された決議文につぎのような考えが述べられている。

それは、縦貫道路が「地域開発と自治体要求とをかくれみのにしており、その本質は資本の要求と開発局の協力誇示、政治利用のなにものでもない」と。すこぶる韜調のはげしい文章である。三年前画を」承認しないよう、強く要請するものであります。また併せていま、大雪山系に計画されている多くの道路建設計画も承認しないよう要請するものであります。

集会アピール

私達は北海道開発局が大雪山縦貫道路の建設を計画していらい、その計画を阻止するため、あらゆる運動をすすめてきました。その運動はきわめて小さな運動から出発し、自然を守ろうと叫ぶ市民としてははじめて経験する多くの体験を重ねてきました。

いま私達と、自然をとりまく環境は、国際的な世論として、まだ共通の政治課題として環境を保護し、自然を守る運動が提唱されるなかで多くの自然破壊が進行し、また新たな自然破壊の計画があります。そして、その元凶が資本の悪質な利潤行為であることも指摘されてきました。

大雪山縦貫道路の計画もまた、しかりであります。

同計画は、地域開発と自治体要求をかくれみのとしながら、その本質は資本の要求と開発局の権力誇示、政治利用以外のなにものでもないことは、私達がその全てを告発した、開発局の資料であきらかであります。

いま多くの経過を経て、環境保全審議会の現地調査が実施され、この結論が全国の自然保護を叫ぶ仲間の大きな注目をあつめています。そのことは、大雪山が日本に残された国際的価値の自然であり、またそれを守る運動が全国の自然破壊を阻止する大きな原動力になるからであります。

いま私達は、審議会の結論を重大な関心をもって注目しながらも、各委員が、環境保全審議会の委員としての良識に従って、大雪山縦貫道路計画を廃案とする当然の方向を、国民の前にあきらかにすることを期待いたします。

しかしながら、私達のこの運動は、この計画の結着のみに視点をおくものでないのは当然であります。これまでの運動が私達に与えた、最大の教訓である自然保護団体の体質を強化し、連帯をつよめ、自然破壊を画策する全ての体制、全ての開発計画、そして今日まで私達をギマンしてきた道政との対決を一層強化し、日本の自然を全国の仲間達と守り抜く決意をあらためて確認し、集会アピールといたします。

一九七三年九月九日

大雪山縦貫道路建設阻止全道集会

の大雪の自然を守る会が結成したときの趣意書――貴重な原始的自然を守れ――という女性的な主張とくらべ一段と成長し、深く本質がえぐられてきている。たたかいの中で体得し、探しあてた大雪山縦貫道の開発計画の背景、じつは、日本の政治の動向―列島改造―新全国総合開発計画（四十四年）―第三期北海道総合開発計画（四十五年）にもとづき、この目標達成のため先導的主要開発事業の一環として、開発計画の動脈的存在でもあったのだ。

だから、この林業版として特定森林地域大規模開発構想（大規模林業圏開発構想）も四十五年から動きだしている。北海道のサロベツ、釧路湿原の開発、日高山脈の横断道路、伊達の火力、岩内の原発、苫小牧東部開発などの列島改造、また「表大雪循環観光産業道路」、大規模林道網、スーパー林道、高密路網など、森林地帯は網目のように道路作設がすでに進行している。これらの中には、山村民や、地域開発とし住民の支持を受けるものも多い。自然保護と相容れない、こうした開発計画といかにたたかうことがよいのか。自然保護のたたかいは難しい大事業だ。

かくして大雪縦貫道路計画は生きつづけ、巧妙に変身し、多様化し機を窺い、自然保護の運動をする人たちの目のとどかないところに潜行出没し、とめどもない自然の破壊をくりかえしていく。こう考えると、市民的な運動がさらに一歩、第一次産業ではたらく人たちや、その分野の専門の技術者や研究者と結びつき、農山村振興や林業振興などの行政的改善をめざし地域住民の利害と対立しないで自然を保護するという広く総合的に高い次元のたたかいに発展できる運動の理論と組織（守る会）の整備が必要に思う。これは複雑で困難なたたかいであろう。

大雪山縦貫道路の計画が中止になった十月のくれ、例年より少し早く大雪山系に雪が降った。この候の北海道の山仕事は終わりに近づき、半年以上も雪に埋まり閉ざされた道民は冬ごもりに入る。道路予定地の峯みねも厚い雪におおわれたことだろう。あわただしかった道路阻止の運動のたたずまいが脳裏から消え、中止の報道でホッとしていた昨日、守る会からハガキがとどいた。

「……縦貫道路計画を撤回させたことは一応の成功に違いありません。……しかし次には、大雪山を含む地域に計画されている大規模林業圏開発計画にとりくみ、北海道の自然を守るために活動をつづけていく」と決意が記されてあった。縦貫道の背後にあるものを探しあてて、冬ごもりするまもなく展望をきりひらいた、大雪の自然を守る運動をたのもしく思う。しかし、林業の研究者としての私は、足もとに火がついたことにあわてている。

森かげにかくれて、仕事ばかりしておれなくなったようだ。

（林業試験場北海道支場）

今後の問題

井手　貫夫

・コメント・

五人の方々の感想を拝見して、五人ともに問題は今後にあることを強く感じていられることは、実際にこの問題に対処して見れば当然感得せずにいられないことながらまことに心強いことである。

前田氏も指摘されているとおり、大雪縦貫問題に対する反対運動は非常に幸運な条件にめぐまれていた。広大な処女地であるということと、北海道のいわば象徴的な場所であるということとのために、全国的な反対運動に盛り上げ得たという点では尾瀬の場合に似た条件があったうえに、地元北海道の実に多くの人々が、それはいわゆる自然保護に平常感心を持つ人々を越えた、たとえば経済界の有力者たちまでが、表面には出ないがやはり反対であった。大雪は北海道の人々と全部にとって聖地であるのである。このことは今後とも、大雪に関する限りは非常に有力な要素である。

しかしこのことは逆に、大雪のように目立った重要な場所ではないが、しかしそれぞれにその周辺の人にとって貴重な自然が開発の危険にさらされた場合、それに対抗する力の非常に弱いという危険をもつことは、小川氏の指摘するとおりである。しかもある意味では、そうした特にとり上げていうほどでない生活環境としての自然を守ることはさらに重要だといい得るのである。

こういう問題は、やはり地元の人々の意識を喚起する以外にない。そのためにはできる限り各地に、たとえ小さいながらも自然保護団体を結成させるとともにはなはだ迂遠のようであるが、他方で自然保護の教育を一刻も早く実施させねばならない。歴史の比較的浅い北海道の場合には、古い歴史や伝統をもつ本州各地とは事情が違うが、それでも各地の郷土愛に訴えることが大切である。少なくとも自分たちの生活する環境をよくする、ということの自覚に訴えねばならない。人々はしかしその前に、生活せねばならないという問題がある。それには、いわゆる大資本的開発が、決して地元のうるおいにはならないことをよく実例で知らねばならない。

たとえば、農民と工業両全の開発振興をうたい文句にした鹿島工業地帯が、いかにその地元民の生活を破壊したかということは、むつ小川原開発計画に地元民が反対に立上がったもっとも根本的な原因である。

新得の大雪を守る会の代表者や前田氏もいうように、本当に地域の過疎問題を解決し、そこを住みよい土地とするため

に何が必要かを研究して、その地域の特殊性を生かしたきめ細かな政策が必要であろう。しかも場合によっては、その時代と特殊な需要のために一時期必要であった地域や、せっかくの開拓に努力してみたもののついに成功の見込みのない地域は、むしろその地域の特殊性に見あった利用を改めて考えねばならないだろう。

小川氏が問題提起をしているように、人か自然かいずれが大切かと聞かれればわれわれ人間としては、もちろん人だと答えざるを得ない。しかしその人の生活環境をよくするためには、自然を無視してはならないのである。もちろん国としての全体的利益のために、ある計画を遂行しなくてはならないことはあろう。しかし、国としての全体的利益とはそもそも何かと問いたださねばならない。

偉大な政治家は、いつも国全体の利害を考えてきた。しかしそれが、いわゆる富国強兵であった時代は過ぎ去ったのである。無論国が豊かであることはよいことであろう。しかし、それが一部企業や大経営者の利害とのみ結びつくことが、これまでは余りに多かった。むしろ国民一人一人が豊かで、しかも健康な生活環境の中に生活し得ることこそ大切なのである。

地域エゴということが、この頃よくいわれる。しかし、必ずしも地域エゴが悪いとはいえない。むしろ国の企画自体がひたすらに空虚な経済成長を追い求めるところに問題があるのである。開発庁というような存在は、どうしてもその役所が存在する限りは開発の仕事を進めずにはおれない宿命がある。われわれに必要なのはもはや開発ではなくて、生活環境の向上なのである。そしてそれは、単に経済成長を目的としてはならない。いたずらに経済成長をせねば成立し得ない、現在の経済機構に問題があるというべきである。

開発庁は、生活環境の向上のための土木施設などの工事をするところとして看板を塗りかえねばならない。いつまでも開発庁であってはならない。そうすればマスコミが尾瀬を忘れた頃に、問題に関連のある道路が車道化されるというようなことは起こり得なくなろう。しかしそれを、私がここで個人の意見として述べるだけでは駄目である。それがやはり諸君一般の共鳴を得て、いわゆる開発に向かっている道の全体的姿勢を、ただす大衆運動にまで発展しなくてはならない。それによってのみ大規模林業圏開発計画も、不合理な部分は阻止し得るのではあるまいか。

私達は今度の反対運動によって、多くのものを得た。それは単に阻止し得た喜びだけではなく、さらに今後に来たるべき開発計画を予測し、それに改めて立ち向かう勇気と心がまえとを得たのである。そしてそれは、大雪道路反対運動以上の多くのエネルギーを必要とし、また一層手ごわく戦いにくい相手であるかも知れない。それを自覚し、しかもそこに立向かう用意と覚悟を私たちが持ち得ることこそより大きな収穫というべきであろう。

事実、小川氏や田代氏が指摘しているとおり、開発側はおそらくこのたびのことで自然保護の重要性を学びとりはしていないだろう。むしろこの人たちの感じたことは、自然保護ということがいまやいかに大きな力となったか、というその事実だけで、ではどうしてこれに立向かって開発を進めたらよいか、ということに彼らの焦点は絞られていくだろう。この人達の意識を変えることは、前に申したとおり、開発庁というその職務がある限りは不可能なことなのである。そのことは何よりも森林を守ることを任務とするはずの林野庁さえ、いまだに疑問点を含む大規模林業圏開発を志している事実によっても明らかなことである。

この人たちを真に自然保護の味方とするためには、開発庁とともに林野庁をも独立採算制の廃止など大きな改革をする以外にはないであろう。それは大雪反対運動よりも更に更に困難な、しかもどうしても克服せねばならぬ問題である。それは国全体の姿勢にかかわる問題であるからである。

大雪道路・大規模林業圏

小関隆祺

大雪山縦貫道路が一応の結末を迎えたことと、その運動に参加した人たちの寄稿とに対して、何かコメントをするようにというのが編集者の注文であった。編集者が私を指名したことは何を意味するかは良くわからないし、また適任とも思わないが、辞退を許されないようなので感想めいたことを述べて許していただくこととする。

はじめに、反対の運動をねばり強くつづけてきた多くの人たちに敬意を表するとともに、その結果を共に喜びたいと思う。私自身もこの問題には大きな関心を持っていたし、あまり積極的ではなかったが、反対の側に立っていたつもりであるからである。この道路に反対した人たちの考え方は大筋では一致していたとは思うが、ひとりひとりをとると多少のちがいがあったようである。私はそれはそれで良いと思っているが、私自身の場合を述べておく。

私は一般論でいえば、国立公園の中にも道路はある程度必要であると考えている。それが産業開発を目的としようが、観光を目的とするものであろうが区別はない。産業開発も観光も、一義的に否定することはできないからである。私はむしろ、どこにどういう道路をつけるかという個々の事例について具体的に問題とせざるを得ないのではないかと考える。

大雪山縦貫道路建設とりやめについて

かねて北海道自然保護協会として反対してきました大雪山縦貫道路の建設は、自然環境保全審議会の反対意向もあって、北海道が提案をとりさげたことにより、当面実施しないことになりました。

貴重な大雪山の自然が心ない破壊から免れたことは、自然保護運動の成果であって大きな喜びとするところであります。この問題の経過において広く各方面からご協力いただいたことを深く感謝いたします。当会としては、今後も大雪山の自然が守られるよう十分な努力をつくす所存であります。

昭和四十八年十月

北海道自然保護協会

その場合に可否をわける基準は必ずしも単純ではなく、多面的な立場から検討を行なわざるを得ない。

この道路に関していえば、私自身が林業の専門家であり、新得側についても美瑛側についてもある程度の知識があったから、林業開発という立場からは無用のものであるという判断はすぐにできる。観光道路と考えた場合にも、峠をこえた通り抜け道路が地元の町村に大きな経済的利益を与えるとは考えられないし、観光客の得る利便はそれほど大きなものではない。その反対に傷つけられ、失われる自然は、はるかに大きいといわなければならないだろう。

大ざっぱにいえば、私がこの道路に反対の立場をとったのは以上の「判断」によるのである。はなはだ非論理的といえばそのとおりだし、また説得的でもないだろう。しかし、これが正直なところである。

反対論のなかには、純粋な自然保護の情緒的主張が多かったようであるし、また、若い体力のある登山家の独善的な主張もなかったとはいえない。結局は独占的観光資本のための地ならしであると、いう主張もあったようである。それ以上に、自然保護の概念のあいまいさ、多様さも指摘しなければならないだろう。しかし、それはそれで良いのであって、同時に、私のような即物的「判断」もあり得るだろう。このような混迷とみえるものも、結局はひとつの過程にほかならない。いまとなっては、その中から何かひとつの筋みちが見えてきたようにも思われる。反対運動が一応の成功に到達したからであろう。

ある特定の地域の自然保護にとどまらず、地球全体の環境保全が問題となっている今日では、人間の生活と資源と生産とのそれぞれ相互関連のうえで、自然保護の位置づけがなされなければならないだろう。そういう意味では今度の問題は貴重な経験ではあろうが、いわば出発点にたったにすぎないと考えるべきであろう。なお、大雪山道路ができなかった理由のひとつは、この道路が北海道の開発全体のなかで、それほど大きなウェイトを持たなかったからであることを認識すべきであろう。

ごく最近になって大規模林業圏の問題が、自然保護関係者の注目をあびているようである。この計画の構想をつくる段階で、いささか関係を持った者として一言しておきたい。

現在の日本の森林はより多くの資本と労働を投下することによって、もっと多くの生産をあげうる潜在力を持っており将来の資源問題を考えると、現時点で飛躍的に大きな投資をする必要がある。とくに、育成過程への投資が要求される。大規模林業圏の考え方は、育成過程への投資を増大して生産性の高い林業を実現しようとするもので、そのために林道、治山、木材工業基地などを含めた総合計画をたてるということであった。

府県の大規模林業圏は従来、薪炭林地として経営されてきた低蓄積の民有林を主対象としているので、北海道の場合と著しく異なっている。北海道では、国有林の天然生林が大きな比率をしめている。しかも、この多くの部分は育成投資がはなはだ少ない林地でしめられている。積極的な育成投資が必要であるという点では府県と同様であるが、現にかなりの蓄積をもっているので、その取りくみ方にはとくに慎重な配慮が必要である。したがって、育成投資を最重要の軸とし、それに林道その他の事業が従属するようにして、総合性を維持するよう意見を述べた。

問題は四十八年度の先発地域において大規模林道だけに予算がつき、育成投資への具体的手当がなされなかったことである。当初からもっとも恐れていた事態となったのである。計画立案当局は林業圏の総合性を維持するよう努力していると聞いているが、予算編成技術からは困難な問題が多いようである。構想自体は全体としての総合性を持っているのに、その一部分たる林道だけをつまみ喰いしたことに問題があるといえよう。

当初の構想にたち戻ることが必要であると思う。また、伝えられる林道計画などもまだ確定案ではないようなので、大いに意見を述べ、あるいは注文をつけることは歓迎すべきであろう。林業の生産行為には、自然保護と対立する面と相互に補完する面とがある。科学性に基づいた論議が深められることを希望する。

昭和四十八年十二月十日発行
札幌市中央区北二条西八丁目
北海道大学植物園内
発行所　北海道自然保護協会
電話(二二)〇〇六六番
発行人　井手貢夫
印刷　札幌印刷株式会社